Sempre　第19回演奏会

谷辺昌央ギターリサイタル

Masao Tanibe Guitar Recital

2010年7月24日（土）14時開演（開場13：30）

場所：白鷹町文化交流センター　AYu:M あゆーむ
入場料：2000円（当日2500円）

チケットご予約は下記までお願いします。

E-mail: nuevo07hp@infoseek.jp
0238-47-5560（小関）
0238-48-2833（浜崎）

program

L.ブローウェル：舞踏礼讃

A.バリオス　M：フリア・フロリダ
（舟歌）
ワルツＯｐ.８Ｎｏ３
最後のトレモロ

A.ピアソラ：５つの小品

F.クレンジャンス：最後の日の夜明けに

F.タレガ：アルハンブラ宮殿の想い出

A.ヒナステラ:ギターソナタＯｐ.４７

他

主催：置賜クラシックギター愛好会・センプレ

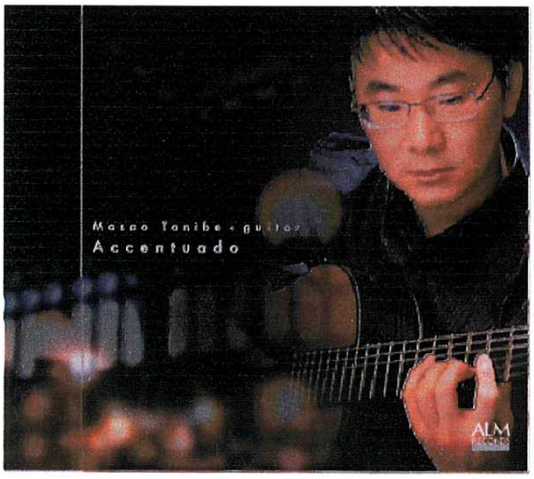
谷辺昌央　プロフィール

名古屋生まれ。4歳より早期音楽教育を受ける。７歳から父のもとでギターを始め、その後酒井康雄、鎌田慶昭の各氏に師事。東京大学在学中に、東京国際ギターコンクールで首席入賞する。1999年よりドイツ、ケルン音楽大学にてR.アウセル氏に師事し、首席卒業。古楽をK.ユングヘーネル氏に、現代音楽をP.アルヴァレス氏に、音楽現象学をH.リウ氏の下で学ぶ。2006年文化庁在外派遣研修員に選ばれ、カールスルーエ音楽大学修士課程にてA.フォン・ヴァンゲンハイム氏に師事し国家演奏家資格を取得。

1986年学生ギターコンクール優勝、GLC最優秀賞、1988年クラシカルギターコンクール優勝、1995年東京国際ギターコンクール首席入賞、2003年ダンツィヒ国際ギターコンクール優勝、2004年ゲーベルスベルク国際ギターコンクール、タイ国際ギターコンクール、イセルニア国際ギターコンクール優勝、2005年ホセ・トーマス国際ギターコンクール首席入賞、2006年ウェストファーレン・ギタースプリング、ノルバ・カエサリーナ国際ギターコンクール優勝、ジョアン・ファレッタ国際ギターコンチェルトコンクール第２位、聴衆特別賞、2007年ニクシッチ国際ギターコンクール優勝。

2005年ワシントンDCのケネディーセンターにてアメリカ・デビュー。2006年ニューヨーク、バッファローにおけるバッファロー・フィルハーモニー管弦楽団との共演は2000人の聴衆総立ちという大成功を収め、全米およびEU全域でラジオ中継された。ドイツのバーデンバーデン・フィルハーモニー、ボッフム交響楽団や、スペイン、モンテネグロ、ブラジルなどのオーケストラと多数共演。アルゼンチンの“世界のギター”フェスティヴァルをはじめベルギー、ポーランド、イタリア、スイス、オーストリア、ルーマニア、ポルトガル、ブラジルなどに招かれリサイタルを行い、いずれも最大級の賞賛を持って迎えられる。

南米ツアーにおいては、ブラジルで日系移民100周年記念事業の一環として、林光のギター協奏曲「北の帆船」を南米初演した。西ドイツ放送、アルゼンチン国営放送、西ニューヨーク放送等へラジオおよびテレビ出演。現在ドイツを拠点に活躍している。



ファーストＣＤ　「Acentuado」 ALM ALCD-7142
¥2940

読売新聞　2010/4/16　サウンズBOX

特選盤◎谷辺昌央「アセントゥアード」　逸材の多い日本ギター界でも、ドイツを拠点とする谷辺の実力は数々のコンクール入賞歴からもうかがえるが、２０世紀後半に書かれた６作品を集めたこのデビュー盤も圧倒的な出来映えを示す。

類いまれな技巧の持ち主であるばかりでない。演奏に対する集中力の高さが聴き手を作品の世界へと引きつけて止まない点こそが谷辺の最大の特質と思われる。アルバムの表題にもなっているピアソラの小品「アセントゥアード（アクセントを利かせて）」でも、わい雑ささえ含み込むタンゴの多彩な感情世界が聴き手の眼前に一気に広がるのである。（ＡＬＭ）（安田）

新譜月評　優秀録音盤　レコード芸術２０１０年５月号

今月の担当分はいずれも粒ぞろいであった。録音が比較的新しいということが要因のひとつだったかもしれない。そのなかからふたつのアルバムに優秀点をつけたが、ひとつはエルシュカ指揮札幌交響楽団の演奏で２枚組の《我が祖国》、もうひとつは谷辺昌央の現代ギター曲のソロ・アルバムである。一方がオーケストラ、一方がソロと編成は極端に異なるが、双方の共通点を見出すとすると”美しい響き感”になるだろう。聴覚を喜ばせてくれる間接音成分をいかに取り込むかということだが、谷辺のギターは２本のスピーカーの中央周辺にコンパクトに音像がまとまるが、非常にのびやかな響きが左右のみならず奥行き、そして上下にまで広がり、聴き手はその響きのなかに引きずり込まれるようで、演奏技術や音色の深み、曲そのものの魅力に誘い込まれる。

レコード芸術２０１０年５月号 録音評　たっぷりとした響きを聴かせながら解像力が非常に高い。しかもその響きの柔らかさや緊張度の高い瞬発力をも聴かせ、演奏とそのテクニック、音色やほどよい空間のサイズをじゅうぶんに伝える。2009年10月、富士見市民文化会館キラリ☆ふじみでの収録で、音像感は2本のスピーカーの中央にしっかりと定位するが、決して固まることのないのびやかさを感じさせる。石田善之